



お問い合わせ

Jan 2021

立教セカンドステージ大学(RSSC)事務室

E-mail: rssc@ml.rikkyo.ac.jp TEL: 03-3985-4672

未来を信じてたゆまぬ学びを

RSSC 学長
立教大学総長 郭 洋春



立教セカンドステージ大学に通う受講生の皆さん、そして 2021 年度入学を心待ちにされている皆さん、新年明けましておめでとうございます。

謹んで新年のご挨拶を申し上げますとともに、2021 年が皆様と立教セカンドステージ大学にとって輝ける年になること、また世界に安寧と平和が訪れることを心よりお祈りいたします。

2020 年はコロナウイルスで始まり、コロナウイルスで終わった 1 年となりました。その結果、日本だけではなく世界中で猛威を振るうコロナウイルスによって、今まで築き上げてきた価値観が揺らぎ、経済社会活動が大きな転換を余儀なくされました。立教セカンドステージ大学においても 2020 年度の春学期は、創立以来初めてすべて休講という措置を取りました。

一方、秋に入学された受講生の皆さんはオンライン授業という例年とは異なる環境のなか、また半期という短い期間のなか、受講や修了論文執筆に注力されていると伺っています。皆さんのそうしたたゆまぬ学びの姿勢は、立教セカンドステージ大学だけではなく、立教大学、研究科にも大きな勇気を与えています。

新年早々緊急事態宣言が再度発令されましたが、受講生および 2021 年度入学の皆さんは決してコロナウイルスに屈することなく、学びを続けて下さい。そして、立教学院に連なるすべての人に勇気を与える存在になることを祈念して、新年の挨拶に代えさせていただきます。

RSSC の一年 一年の集大成 修了論文・修了論文発表会

新たな年を迎え、1 月はいよいよ**修了論文提出**の時期となります。4 月のゼミナル開始当初は、「果たして自分が修了論文を書けるのだろうか」と不安を抱いていた受講生も、担当教員の指導のもと、ゼミ仲間とアドバイスし合い、時には議論しながら、素晴らしい修了論文を仕上げています。

そして毎年、修了論文提出にまつわる様々なエピソードが生まれます。「1 番に提出したい！」と受付開始時間のかなり前から（事務室スタッフが出勤する前から！）待っていた方。その一方、何度も読み返し修正をされていて、受付終了時間ぎりぎりに滑り込みで提出した方もいました。他にも、当日の電車の遅延やパソコンの故障など、幾多の苦難を乗り越え、期限内に無事に提出した後の、皆さんのとてもほっとした様子。事務室スタッフも思わず「お疲れ様でした」と声を掛けてしまいます。今年度は、RSSC では初めて、郵送での修了論文提出となり

ます。郵送の場合は、なかなか「1 番に提出」は狙いにくいかもしれませんね。

修了論文を提出し終わると、修了までのキャンパスライフを満喫すると同時に、3 月に行われる「**修了論文発表会**」に向けて準備が始まります。受講生から選出された「修了論文発表会委員会」メンバーによる企画・運営のもと、例年 2 日間行われます。発表者は各ゼミ毎に 2 名選出されますが、発表者以外の受講生も、パワーポイントの作成やスピーチ練習のサポート、当日のパソコン操作補助などを行い、ゼミ全体での参加となります。どのような想い、どのような希望、どのような問題意識を持って修了論文に取り組んだのか等、他の受講生の発表を理解することを通じて、立教セカンドステージ大学の理念である「学び直し」「再チャレンジ」が捻れていることが実感できる機会となります。次回は、「初春の課外活動」を予定

RSSC 事務室から、キャンパス便り

建物周辺に芝生が
広がる 1 号館

今回は池袋キャンパスから離れて、**新座キャンパス**の紹介をします。最寄りの東武東上線志木駅は、池袋駅から電車で約 20 分。駅からスクールバスや徒歩で向かうキャンパスは、緑あふれる広大な敷地が広がり、穏やかな雰囲気。学部に関連した施設、グラウンドなどの体育施設がゆったりと点在します。地域社会と密着したオープンな雰囲気が新座キャンパスの特徴です。



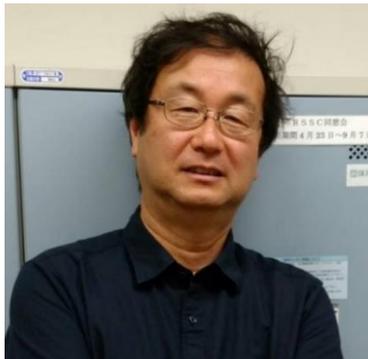
ステンドグラスに込められた思い

新座キャンパスの立教学院聖パウロ礼拝堂は、正門入り口の真正面に位置し、アーチ形の屋根を組み合わせたチャペルです。1963年に建築家アントニン・レーモンド氏の設計で建てられ、2013年に仏ロマン派様式のパイプオルガンが導入されました。そのチャペルを彩るステンドグラス。左右対称のデザインは「神の完全」を表したのですが、実は一カ所だけ非対称になっているところがあります。これは、人間は不完全な存在であり、わからないことやできないことがあるのを忘れないようにするため、意図的にデザインされたと伝えられています。



古今集とオンライン 4月からの授業に向けて

RSSC 教員
立教大学文学部教授 加藤 睦



私は文学部の教員で、日本の古典文学を専攻しています。来年度（2021年度）は、立教セカンドステージ大学（RSSC）で、古今和歌集を読む授業を行います。それに先立って今年度、文学部の学生向けのオンライン授業で古今集を講義しました。そこではオンラインという授業形態も含めて、あれこれ試行錯誤しましたが、そこでの教訓を生かして、4月からの授業に臨みたいと思っています。

古今集の特徴は〈知的な趣向〉と〈表現の工夫〉にあります。一首例をあげてみましょう。

冬ながら空より花の散りくるは雲のあなたは春にやあるらむ（古今集・冬歌・清原深養父）
（今は冬なのに空から花が散ってくるのは、雲の向こうはもう春なのであろうか。）

清原深養父（きよはらのふかやぶ）の詠んだこの歌は、雪が降ったのを見て詠んだ歌で、なかなかよい歌だと思うのですが、そのよさを伝えるのはそう簡単ではありません。

〇「雪」を「花」に、「花」を「雲」というように、別のものに見なすことを、「見立て」という。

〇末尾の「らむ」は、今いる場所とは違うところで起きていることを、「（今ごろ）～しているだろう」と推量する時に用いる。

といった知識を説明しますが、歌の理解にはつながりません。そこでさらに、

「空から降ってくる雪がまるで花のようだ」と比喻を使って表現することもできるのですが、そうしないで、「冬なのに花が散ってくる」と驚いて見せています。さらに、その花が雲の向こうから散ってくるのだから、雲の向こうはすでに春になっていて、桜の花が咲いているということを想像しているんです。風流でしょ？

などと説明しますが、なかなかうまくいきません。多くの学生は、〈すなおな発想〉〈飾らない表現〉を好みがちなので、「雪を花に見間違えたりしないよ。」「雲の向こうは春なのだろうか、だなんて暇だね。」というふうに思われる確率は、かなり高いと思われます。ではどうすればよいか。。。ここから先の工夫は、来年度4月開始の授業で実践したいと思っています。機会がありましたら、お聞きいただくとありがたく存じます。

オンライン授業という方法にも、いろいろ戸惑って苦労しました。教室の授業だと、プリントを配布し、出席を取り、「今日は寒いねえ」と時候の挨拶をし、「そこうるさいよ」と学生の私語を注意し、自ら授業を脱線して延々と雑談し、などなど、隙間の部分があるのですが、オンラインだと、肝心なことがばかり最初から最後までしゃべり続けることになりがちです。これは、受講者にとって重い負担になるので、できるだけ授業中に考えてもらう時間を設けたり、クイズを出したりして、変化をつけなくてはいけないことに、だんだんと思い至りました。RSSCの授業でも、ホトギスやマツムシの鳴き声を録音で聞いたり、ハギとオギの違いを画像で見たり、どの歌がよいか授業内アンケートを取ったりなど、いろいろためになる〈遊び〉の部分を用意したいと思っています。



2017年度加藤ゼミナールの受講生とともに

〈教員専門分野〉
中古・中世和歌文学